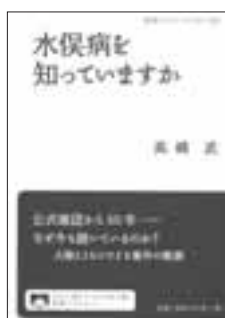


## 書評



高峰 武著

## 『水俣病を知っていますか』

岩波ブックレット、2016年

評者 池田 理知子

福岡女学院大学教授

## I. はじめに

「水俣病を知っているか」と問われると、返答に困ってしまう。それは、鹿児島で生まれ育ったにもかかわらず、10年ほど前までは水俣病のことをほとんど知らず、しかも関心すらもっていなかった自らの姿勢を責められているように思えてしまうからである。私が水俣病のことを知っていると自信をもって言える日など、この先も訪れることはないに違いない。

そうしたことを思い起こさせてくれたのが、高峰武が著した『水俣病を知っていますか』である。「世界に例をみない健康破壊、環境破壊である水俣病だが、どんな歴史があったのか。今なお、多くの人たちが救済を求めているのはなぜか。こうしたことをどこまで私たちは知っているだろうか」(p5)<sup>1)</sup>と著者は私たちに問いかける。

## II. 水俣病のはじまり

本書は水俣病の第一号患者である田中実子のこれまでの人生を描くところから始まっている。24時間ヘルパーの介助を受けながら、生まれ育った家で今も暮らす彼女の存在は、水俣病問題を考えるうえで重要な意味をもつ。その彼女のことが忘れ去られそうになっている現状に、著者は警鐘をならす。

実子と彼女の姉である静子が原因不明の疾患に罹っていることが保健所に届けられたのが、1956年5月1日である。水俣病の公式確認日として、毎年その日に慰霊式が催されている。しかし、水俣病発生の起点をそこに求めてしまうと、問題を見誤る。著者が指摘するように、「水俣病は1956年の公式確認に始まったわけではない」(p22)のだ。公式確認後に発足した「水俣市奇病対策委員会」が行った調査では、「発生が1953年までさかのぼることができること」(p11)が確認されている。ただし、そこを起点としていいのかについても議論の余地がある。本書の最後に載せられている年表からもわかるように、1932年にはチッソ水俣工場であセトアルデヒドの生産が開始されており、1953年以前に被害の発生がなかったとは言い切れない<sup>2)</sup>。結局、水俣病発生の起点がどこにあるのかですら、私たちはいまだにはっきりと

は知らないのである。

### Ⅲ. 水俣病という「病」

私たちは、水俣病という「病」がどういうものかを知っているのだろうか。本書を読み進めていくと、そういう疑問が浮かんでくる。水俣病の病因物質はメチル水銀で、それが食物連鎖により魚貝類に濃縮され、その汚染された魚貝類を人が食べたことで発症するというメカニズムがわかっただけでは十分とはいえない。

そうした原因究明の前にやるべきことがあったのに、なされなかったことがこの本には記されている。公式確認の翌年である1957年、水俣で発生した病が水俣湾の魚介類を食べたことに起因する中毒との疑いが強まったことから、熊本県が当時の厚生省に食品衛生法の適用の可否を照会したところ、否定的な回答を得たため、結局適用されなかった。

また、本書の同じ箇所には「津田裁判」<sup>3)</sup>についても述べられている。原告である津田敏秀は、食品衛生法に基づき水俣病食中毒調査を行うこと、1956年の水俣病の公式確認以来一度もこの法律に基づく調査が実施されていないのは違法であることを主張している。たとえば仕出し弁当を食べて食中毒になった場合、何がその原因かを究明するよりも前に、まずその弁当を食べないような措置がただちにとられるはずだが、水俣病の場合はそうならなかった、これはおかしいことだとその矛盾を突いているのだ。水俣湾の漁獲禁止という本来とられるべき措置がなされず、水俣病の病因究明へとその焦点は移っていった。

著者は、「前例のなさ、休業補償の問題、折に触れて表面化するチッソへの配慮」(p13)といったさまざまな背景があったが故に漁獲禁止の措置がとられなかったのではないかと記しているが、付け加えるとすれば、疫学的な観点から病の発生を未然に防ぐという考え方が主流とならなかったことがあげられよう(津田, 2004)。そしてその遠因となりうるのが、根強い「特定病因論」原理への信奉である。「病」は特定の病因物質によって引き起こされるというこの原理は、近代医学を特徴づけるものの一つで、「特定の原因－特定の結果(病気)」というように病気の発症を因果論的に説明するものである(佐藤, 2010: 58)。被害の拡大を防ぐという観点からいうと、水俣病においては「特定病因論」原理がむしろ足かせにすらなっていたのではないだろうか。

病とは社会的なさまざまな権力が絡み合ってつくり出されるものでもある。本書の第4章「水俣病とは何か」に記されているように、政治的な思惑が絡み合っ水俣病かどうかの判断が下される。しかもその判断は、ある一点——「何人、いくらか」(p43)といった金勘定の問題に集約されること——を除いて恣意的である。だからこそ私たちは、水俣病という「病」が何なのかを知っていると確信をもっていえないのである。

#### Ⅳ. 水俣病被害の広がり

水俣病の被害はいったいどこまで広がっているのだろうか。水俣病は「水俣市だけで起きたわけでもない」(p22)と著者が書いているように、その被害は広域に及んでいる。たとえば、当時の山野線やトラック輸送によって、水俣からかなりの数の海産物が山間部にも運ばれていたことはわかっている。したがって、水俣から離れた場所であっても患者が発生する可能性があることは容易に想像できる。にもかかわらず、2009年に成立した「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法」は、限定された地域を指定し、その内と外を分けるといった「線引き」を行った。そして指定地域外の申請者には、メチル水銀へのばく露を証明する証拠の提出を求めたのだ<sup>4)</sup>。こうした理不尽な「線引き」に対して、対象外とされた人たちが訴訟を起こしていることがこの本には記載されており、繰り返されるこのような「線引き」に対して著者はいらだちを隠さない。

「線引き」の問題と言語の選択は、深く結びついている。ことばとはそれが何であり、何でないかを示すものであって、境界線を浮かび上がらせるものなのだ。このことは、本書にたびたび登場する川本輝夫の水俣病の呼称へのこだわりを思い起こさせる。1981年、彼が所属する「水俣病患者連盟」は水俣病のことを「チッソ水俣病」と呼ぶことを宣言し、会の名称も「チッソ水俣病患者連盟」とした。チッソが水俣病の原因企業であることを訴え続けていくための決意の表れだったと思われるが<sup>5)</sup>、こうした名称を使うことで水俣病の輪郭が浮かび上がる。「チッソ水俣病」と呼ぶことにより、「新潟水俣病」ではないことが示されるし、この問題が水俣市だけの問題ではないこと、熊本県だけの問題でもないこと、つまり境界線がもっと先にあることがみえてくるのだ。

#### Ⅴ. おわりに

本書の第5章のタイトルが示すように、「水俣病は続いている」(p53)。そしてその被害がどこまで広がっているのか、いまだに見えてこない。そうなってしまった理由の一つとして考えられるのが、不知火海沿岸を中心とした大規模な健康調査が行われてこなかったことである。著者はそのことを繰り返し述べている。そして、「一帯の健康調査がなされなかったために、その後どんな対策を打っても網の目からこぼれた被害者がでてくる」(p67)のだと断言する。

水俣病の被害者は、私たちの想像をはるかに超えたところに存在しているかもしれない。たとえば、水俣湾を埋め立てて封じ込めたはずの水銀ヘドロが再び環境中に放出されるようなことになれば、水俣病の悲劇が再び繰り返されてしまうからだ。このように、これまで起こった被害だけでなく、これから起こりうることも含めて考えると水俣病被害の全容はいまだに漠としてつかみえない。

「すべてを知っているなどとゆめゆめ思うなよ」(p52)という声が聞こえてくる。結局こ

の本は、私たちがいかに「水俣病」のことを知らないのかを突き付けているのだといえる。しかし、だからといって諦めることはない。この本のタイトルが暗示しているように、知っていると思ってしまうことの危険性と、知ろうとするプロセスの重要性の両方に私たちは自覚的であるべきなのだろう。つまり、私たち一人ひとりが水俣病問題とどう向き合うのかが問われているのだ。

#### 注

- 1) 『水俣病を知っていますか』（高峰，2016）からの引用はページ数のみ記す。
- 2) たとえば、『水俣病の民衆史 第一巻』（岡本，2015：439）には百間港で三重ガシ網漁をやっていた漁師が頭痛や手足のしびれ、卒倒などの症状が出て、1952年に漁を止めた話が載っている（岡本，2015：439）。板井八重子の研究では、1931年から1940年に汚染地区で生まれた母親の流産を含む異常分娩が多かったことが報告されている（原田・田尻，2009を参照）。
- 3) 2016年12月東京地裁が訴えを却下、2017年7月東京高裁も訴えを却下。2017年11月現在、上告中。
- 4) ヘその緒や過去の毛髪水銀値の科学的データといった具体的な証拠や、戸籍などのかつての居住地域がわかるもの、魚介類を摂取していたことの証明となる鮮魚店や行商人の承認書といった書類の提出が求められる。また、「時」に対する「線引き」も行われており、「救済」の対象者は1968年末までに生まれた者で、翌年の11月までに生まれた者も胎児のときに母体を通じてばく露した可能性を考慮するとなっている。それ以降に生まれた者は指定地域外と同様の書類の提出が必要。
- 5) 高校の教科書に掲載されている石牟礼道子著の『苦海浄土』からチッソの名を外せとの文部省検定官からの修正意見が付いたことがきっかけで、会の名称を変更した（川本、2006：721）。

#### 引用文献

- 岡本達明『水俣病の民衆史 第一巻』日本評論社、2015。
- 川本輝夫『水俣病誌』世織書房、2006。
- 佐藤純一「生物医学」中川輝彦・黒田浩一郎編著『よくわかる医療社会学』ミネルヴァ書房、2010、pp.56-59。
- 津田敏秀『医学者は公害事件で何をしてきたのか』岩波書店、2004。
- 原田正純・田尻雅美「小児性・胎児性水俣病に関する臨床疫学的研究—メチル水銀汚染が胎児および幼児に及ぼす影響に関する考察」『社会関係研究』14-1、2009、pp.1-66。